



ローマ人への手紙の構造 1章～16章

2014.4.22

ローマ手紙

罪の奴隷から義の奴隷へ。死から命へ。
新しい出エジプト。

<p>Q:-11:</p> <p>主の御名 (Ex.34) あはれみ、恵み</p> <p>互いに愛し合う。 12:13-17 互いの愛、愛の御名、愛の御名 (福音、大衆の愛 Ex.25-)</p> <p>12:-15:13</p>	<p>1:16-4:</p> <p>Ex.12: 心の割礼 (過越) 2:29 Ex.12:</p> <p>永遠のいのち 御霊 (水、マナ) Ex.15:-17:</p> <p>5:-8:</p>
---	--

15:14-16:27

1:1-15

- ・ 1:と 9:にある文に比べて、どのおうそがあるか!
- ・ 29人、異邦人
- ・ 信仰による義、割礼による義 (神の御名)
- ・ 神の義、自分の義 10:3
- ・ 恵み、あはれみ、いつくしみ、選び。
- ・ 怒りの器、あはれみの器、9:22-23
- ・ 選ばれる、捨てる、選ぶ 11:

ローマ人への手紙の全体の概略は、出エジプト記の概略と一緒に見るということをやっています。ローマ人への手紙が4つの段落に分けられるということは、以前にやりました。最初の導入と挨拶のところに、福音の力を知らせることによって、信仰の従順をもたらすための手紙だということが言われています。その信仰の従順をもたらすということを説明しているのが4つの段落です。

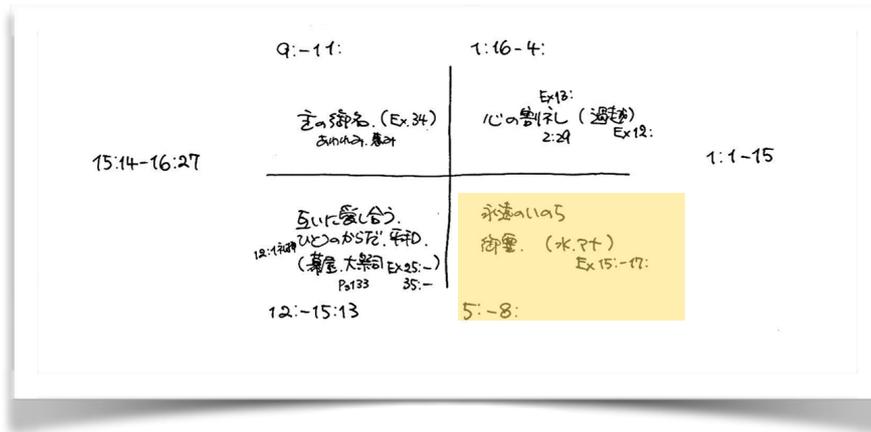
<p>Q:-11:</p> <p>主の御名 (Ex.34) あはれみ、恵み</p> <p>互いに愛し合う。 12:13-17 互いの愛、愛の御名、愛の御名 (福音、大衆の愛 Ex.25-)</p> <p>12:-15:13</p>	<p>1:16-4:</p> <p>Ex.12: 心の割礼 (過越) 2:29 Ex.12:</p> <p>永遠のいのち 御霊 (水、マナ) Ex.15:-17:</p> <p>5:-8:</p>
---	--

15:14-16:27

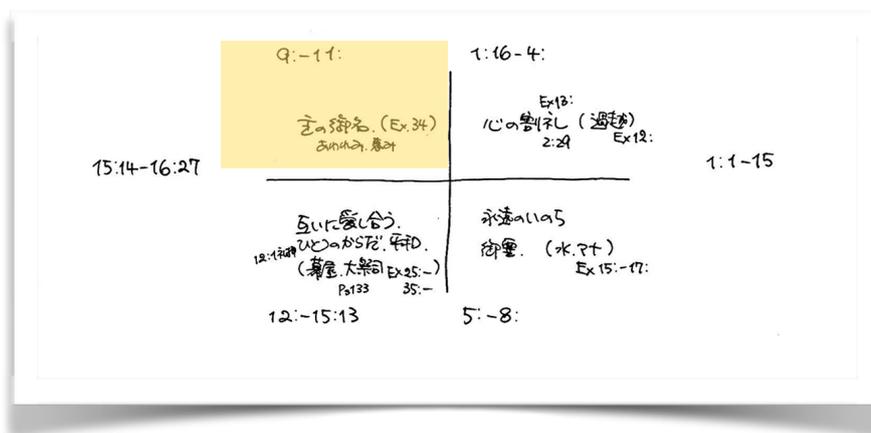
1:1-15

最初は（表の上段右）、「義と認められて神様の子どもになる人はどういう人なのか。」信仰による義というのがよく出てくるところです。ここで2:29心の割礼という言い方をして、義と認められることについて話します。それは、過越のいけにえです。過越のいけにえを捧げる時に、まだ割礼を受けていない人は割礼をしなさいと言われて、割礼と過越のいけにえは同じようなものだということがその出来事からもわかります。

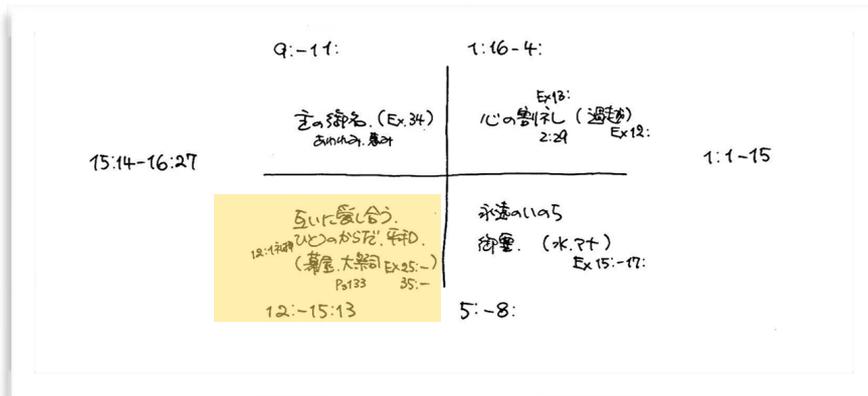
その過越、割礼をすることによって、義と認められる儀式だったわけです。血をながすことによって義と認められますというのが、最初の段落です。



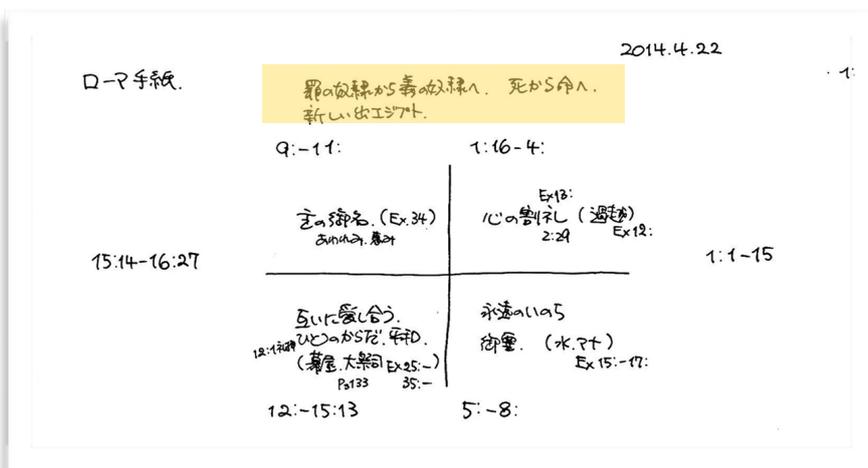
次の段落5章から(下段右)、「だから、神様の愛が表されているのですよ。」という段落です。その段落では、永遠のいのちが与えられること、そして7章、8章は御霊があたえられること。それは出エジプト記でいうと、水が与えられること、命のパンであるマナが与えられること。これが2番目の段落です。



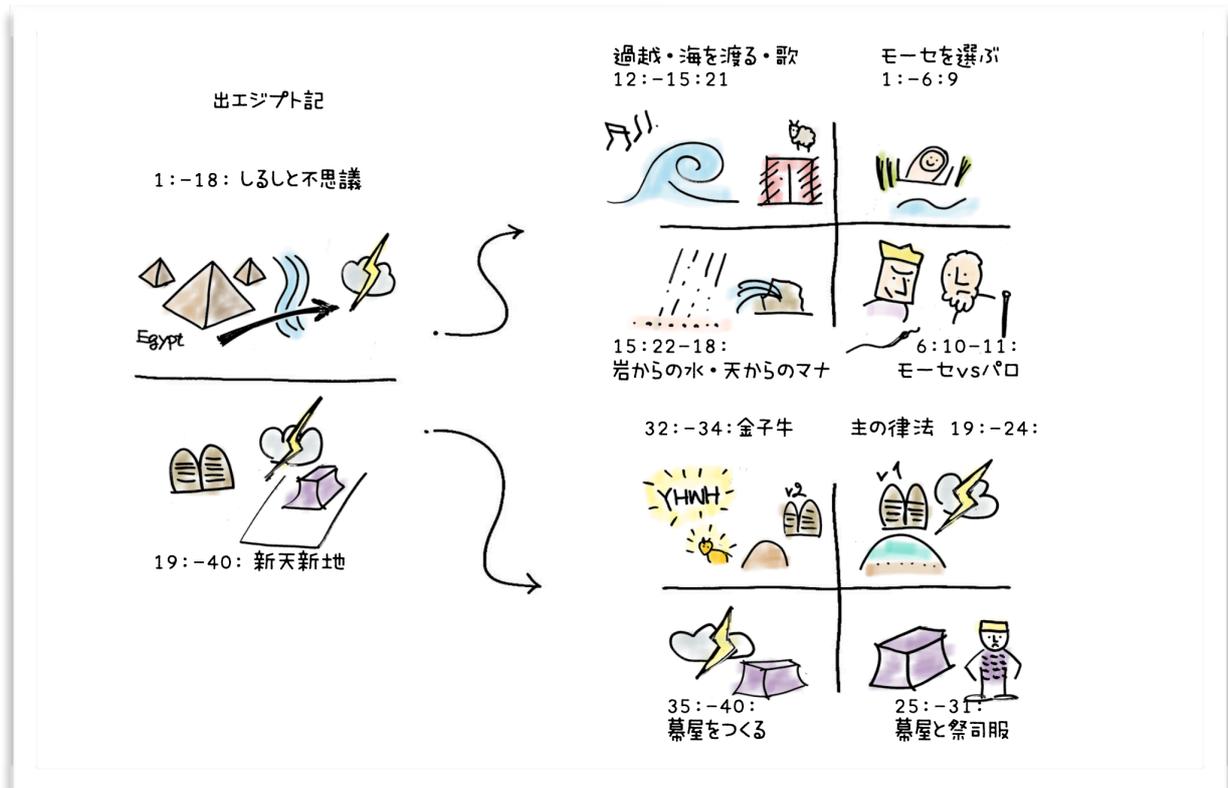
3番目の段落(上段左)。ここでは、「じゃあ、イスラエルは捨てられたのですか。」ということに対して、「いや、そんなことはない。」と神様の憐れみ、その隠されている知恵。これは、私たちの思いをはるかに超えている、その奥義を知っていただきたいというところで何度も言われているのは、主のあわれみです。主はあわれみ深く恵み深い、怒るのに遅く(…という)神様の主の御名の宣言のところ。出エジプト34章で言われている主のあわれみの名、神様の義。神様の義というのは神様のあわれみという言い換えができますけれど、そのあわれみの主の御名が9章から11章までのところであらわされている。その神の知恵と知識との富は、底知れず深い。その知恵について教えている段落です。



最後に12章から15章は（下段左）、「互いに愛し合いなさい、互いに受け入れなさい。」ということが何度も言われています。その目的は、ひとつのからだである。キリストの教会はひとつのからだですから、互いに愛し合って平和を求めなさい。そのシャロームという状態は、ひとつであるという祝福です。12章からの段落の最初のところで言っているように、互いに受け入れてひとつになるということこそ礼拝であると言われています。出エジプト記でいうと、この段落は、特に幕屋の作り方、大祭司の認証です。大祭司を選ぶ、その選ぶときのいけにえだったりしますけれども、幕屋と大祭司についての教えが書かれているのがこの出エジプト記の最後のところです。その主の栄光があらわされる、主の栄光の雲が共にいるということですが、詩篇133篇にあるように、ひとつになって住むということが、主が求めておられるところ、民が愛に満たされて平和であるということが神様の求めておられることです。こちら（上段左）は恵み、こちら（下段左）は平和ということも言えると思います。



全体としては、罪の奴隷から義の奴隷へ、死から命へという新しい出エジプトのテーマがローマ人への手紙の全体の概略であるということが言えると思います。



出エジプト記の概略については、こちらのチャートをご覧ください。こちらのチャートは、出エジプト記の全体を2つに分けて、なお且つこのひとつのものを4つの段落に分けて、こちらの後半も4つに分けているというようにみえていますので、これを参照してください。